神殿落成50年を迎えて

教祖百四十年祭

五代会長を芯に、一手一つに普請に伏せ込んだ

今年、大教会現神殿が落成して50年を迎えました。昭和48年5月20日、教祖九十年祭へと向かう三年千日の1年目のことでした。

お道の普請は、ただ建物を建てるだけではなく、形の普請を通して「心のふしん」に励むことが大切とお聞かせいただきます。「心のふしん」とは、自分の心を一歩一歩陽気ぐらしへと近づける努力の姿であり、そこに尽くした真実は伏せ込みとなって、「たすける理、たすかる理」となるのです。

普請に限らず、おぢばや教会に真実を尽くし運ぶことは、「時間や生活に余裕があるから」と、余力を充てるものではありません。自分のできる限り、精いっぱい心を尽くし、身をもって実行し、自ら通って喜びを味わうところに、陽気ぐらしへと近づく成人の姿を見せていただきます。さらにその真実は、将来のおたすけへと繋がる理づくりとなるでしょう。

50年前に真実の限りを尽くされた先人たちに倣い、私たちも自分の持てる力の限りを出し尽くして、教祖百四十年祭へ向かう三年千日を「成人の旬、たすけの旬」にして、教祖にお喜びいただきましょう。

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

たすけとても一日なりともひのきしん、一つの心を楽しみ。たすけふしぎふしん、真実の心を受け取るためのふしぎふしん。

明治23年6月15日

四方正面

先日、大教会の神殿普請の用材を納めた大昭林業のY氏の娘と孫が大教会を訪ねてきた。Y氏が病床で「納めた木材がどのように出き上がったのか見に行きたい」と言い残していたからである。神殿中段の上がり框（かまち）に使用した18メートルの桧材は当時でもなかなか手に入らないものだったが、施行業者は節があったため使用を反対していた。しかし、ようぼくで大工のK氏が「節があって当然」と、そのまま使用したという。先方は「父はそのことを非常に喜んでいた」と話され、親の仕事を子孫に伝えようと、両親の遺影と共に、節の部分が映るように写真やビデオを撮って帰られた。

この5月、大教会の神殿落成から50年を迎えた。立派な神殿を創り上げた先人方のご苦労とご苦心に衷心より感謝の意を捧げ、心勇んでたすけづとめに邁進しよう。（奥）

《４月月次祭　挨拶》

教祖のおたすけと丹精のひながたを手本に

大教会長　井筒梅夫

皆様方には、教祖百四十年祭に向かう時旬の道の上にお励みくださいまして、誠にご苦労様でございます。明後日、教祖には225回目のお誕生日をお迎えあそばされますが、今日は教祖のお誕生日を共に寿ぎ申し上げながら、心晴れやかに勤めさせていただき、大変ありがたい次第です。

今月は初の試みとして、従来の神殿講話に代えて、２人の方に登壇していただいて月次祭感話を行い、各々の信仰体験を通して御守護のありがたさ、信仰の素晴らしさを語っていただきました。親にもたれて通っていればこそ御守護があり、教祖が間違いない道へと手を引いてくださるということを、２人の感話から改めて認識させていただいたように思います。時旬の道を進む上で、これもお手本の一つになるだろうと感じているところです。

教祖は、世界一れつをたすけるために親心を尽くし切って、たすけ一条の道をおつけくださいました。その一番の御苦労は、教祖の言動を理解しない人たちに親神様の教えをいかに伝えるか、というところにあったのです。

そこでまず教祖は、ひながたの道の前半は、尽くし、伏せ込みの世界をお通りくださいました。たすけ一条の道で事を成すための「理づくりの大切さ」を教えていただいているように感じます。

そして、ひながたの道の後半は、をびや許しを道明けとして、次々と人々をおたすけなさいました。さらには御守護を乞い、教祖を慕ってお屋敷へ帰り来る人々を、人だすけができるように導き育てられたのです。教祖は人々を引き寄せておたすけをされ、道具衆へと育て導くことに苦心をしてくださったのです。

このひながたを辿らせていただこうと、三年千日の方針の一つに「人をたすけ、人を育てる」、つまりおたすけと丹精を掲げたわけです。

明治７年のある日、教祖から、

「大和神社へ行き、どういう神で御座ると、尋ねておいで。」

『稿本天理教教祖伝』115頁

とのお言葉を頂いた仲田儀三郎、松尾市兵衛両先生は言いつけ通りに大和神社へ出向かれます。大和神社は崇神天皇の時に鎮座したという由緒深い神社であり、一方、お二人の先生の家は農家で、学問を深く修めたというわけではありません。ですからこの御用は、お二方にとっていささか荷が重かったかもしれませんが、教祖はこの方たちをお使いになられたのです。

また、茶店で教祖の噂を聞いた福井県の男性は、娘の精

神病をたすけていただきたいと初めてお屋敷に帰り、教祖にお願いを申し上げたところ、

「村の中、戸毎に入り込んで、四十二人の人を救けるのやで。なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻わるのやで。人を救けたら我が身が救かるのや。」『逸話篇』四二「人を救けたら」

とのお言葉をいただいて、それを素直に実行したところ、娘さんは鮮やかに御守護を頂いたという逸話があります。

この男性にとれば、病人を探して、これまでに聞いたこともない神様の話を、村中ににをいがけに回るわけですから、躊躇（ためら）う場面もあったでしょうが、娘を思う一心でやり遂げたのです。ここには精神病という難しい病の御守護を頂かせるには、人だすけの実行しかない、なんとかこの娘をたすけてやりたい、という教祖の親心があるのは容易に想像ができます。

これを思えば、先程の感話にあった島原分教会・岩切正幸前会長さんと、撫養大教会・土佐やすゑ奥様の導き方に、教祖のおたすけと丹精のひながたを見るような気がいたします。もし二人の先生が情に流されていたら、また感話をされたお二人に聞き分けがなかったら、どうなっていたんだろうか。おそらく今日の日はなかったと思います。お二人ともよく歯を食いしばって通ってくださったなと思います。そのおかげで御守護があり、今日の各々の道があるのです。よく導いてくださったな、よくぞついていかれたなと思わずにはおれません。ここに道の親と子、導く者と導かれる者の繋（つな）がり、深い絆が生まれるのだなと、感心をしているところです。

人をたすけ、導き育てるためには、理と情の二つが欠かせません。情だけに頼ると、たすかるものもたすかりませんし、理だけを押し通しても、聞けるものではありません。理と情は不可分の関係であり、二つ一つのものです。

教祖のなさったおたすけと丹精のひながたを手本に、「この人になんとかたすかっていただきたい」「成人をしてもらいたい」と相手のことを真剣に思って情をかけ、その人が一歩でも二歩でも成人できるところへ導くことができるように、労を惜しまず、苦心をして、人をたすけ、導き育てることにしっかりと取り組ませていただきたいと存じます。

来月の月次祭は世話人・島村廣義先生のご巡教がありますので、おぢばの声を聞かせていただく機会でありますから、どうかお誘い合わせてご参拝くださいますようお願いいたします。

今月の月次祭、大変ご苦労様でした。

（要約）

《４月月次祭　感話》

理の親の声は　神の声という信念で

芦島鶴分教会　藤田典子

私は祖父の代から信仰のある一信者家庭で育ちました。小さい頃は婦人警官を夢見て、大阪府警白バイ隊に憧れていました。しかし、180倍という超難関の壁を打ち破ることはできず、かねてより両親と約束していた修養科に入らせていただきました。そこで当時、大教会青年勤めをしていた教会の後継者と出会い、結婚いたしました。

私たちの新婚生活は、上級・島原分教会へ３カ月間の住み込みから始まりました。これから始まる初めての教会生活に意気揚々と大阪南港からフェリーに乗り、島原へと旅立ちました。

しかし、その２週間後、小さい頃から何一つ身上のなかった私に、突如Ｂ型肝炎が発症していることが分かりました。毎日しんどく、トイレに行くことがやっとで、横になって寝ていることしかできない日が続き、教会の御用は何一つできませんでした。

１カ月程経った頃、島原の会長様より、「３カ月の住み込み期間を２年に延ばして、ここで肝炎の御守護を頂くように」と言われました。「こんな身体で２年間も勤まるのかな。ここにおいてもらっていいのかな」と一人天井を見つめて泣いてばかりいました。

そんなある日、島原の前会長様から、「身に付けている物、持っている物、全てお供えしなさい」と言われ、私は一瞬、頭が真っ白になりました。今まで愛着のあった洋服を手放すこと、ましてや両親が思いを込めて持たせてくれた物を手放すことなど到底できることではありませんでした。そして、いくらどう考えても、肝炎が治るということと、身に付けている物、持っている物全てをお供えするということが結び付かず、「天理教ではここまでしないとたすからないのかな」と逃げ出したい気持ちでいっぱいになりました。当時の私には前会長様の親心など到底分かるはずもありませんでした。

そうしたときに、前会長の奥様が、「あなたは自分自身のことだけど、天理教では人だすけのためにさせていただくものなのよ」と諭してくださいました。また、主人からは、主人の母もおたすけのために幾度となく衣服を丸ごとお供えさせてもらってきた話を聞かせてもらいました。

徐々に心が治まり、その晩段ボール箱に詰めました。思いのこもった服を１枚１枚重ねながら、「どうか御守護いただきますように」と一生懸命願いを込めました。段ボール箱は４箱になりました。

しかし、１カ月経っても２カ月経っても、Ｂ型肝炎の容態は良くなるどころか悪くなる一方で、月のうち寝ている日も多くなっていきました。

その年の12月、とうとうお医者さんから、「もう肝臓が限界にきています」と、年明けからのインターフェロンというお薬の投与を言い渡されました。その薬の服用期間は長く、また副作用は非常に大きく、うつ病や発熱、抜け毛などを聞いていましたので、治療とはいえ、そうなる自分を想像しては気持ちも沈んでいました。

御守護の陰の真実

そうした治療を待つばかりの12月26日、転機が訪れました。

妊娠したのです。不思議なことに、肝臓の数値はほぼ正常値にまで下がっていました。お医者さんの説明によりますと、妊娠すると全ての臓器は、母胎とお腹の赤ちゃんを守ることを最優先するため、肝臓はウイルスと戦うことを止めて、その結果肝炎は一時的に治まるということでした。

あとほんの少し妊娠が遅れてい

たら、インターフェロンの投与と重なり、お腹の赤ちゃんはどうなっていたか。またそれ以前に女性ホルモンのバランスが崩れているので妊娠すること自体が極めて難しいとさえ言われていたのです。

この何とも言えない絶妙なタイミングといい、計り知れない大きな御守護といい、人間の知恵を超えた親神様のお働きに、こんなことが本当にあるのかと私は深く感動しました。

もちろん、この御守護の陰には大きな真実がありました。毎日寝ているだけの私に主人は、1度として不足を言うわけでも責めるわけでもなく、天井に「必ずたすかる」と、よく見えるように大きな貼り紙をしてくれました。そして、「一生かかってでも治したらええんや」と言いながら、上級の御用の合間をぬっては、十二下りやトイレ掃除、神名流しなど、「これでたすけていただける」と浮かんだことは片っ端からしてくれました。

厚い親心と真実

一方で母は、島原の前会長様より「今までの3倍のおつくし、年間1千万円を心定めしなさい」と言われておりました。当時、事情教会を立ち上げて、まだ7年目のことでした。小さな教会のどこにそんな力があるのか、一体誰を頼りにすればよいのか。

しかし、理の親である前会長様の「何としてでもたすけたいんや」という強い思いを受けて母が奮い立った途端、次から次へと不思議なおたすけをお見せいただきました。必死で奔走して、結果その年から3年間、毎年心定め通りのお供えをさせていただくことができました。それはただ「理の親の声は神の声」という母の信念を神様がお受け取りいただいたという他、ないと思うのです。

そして、前会長様ご自身も、3倍のおつくしを実行されたと随分経ってからお聞きしました。

その後、次男を出産する際、憩の家のお医者様から、「もう肝炎は完治しています。病院に来なくてもいいですよ」と言われました。

薬1粒、注射1本打たずして肝炎を御守護いただき、さらに子供までお与えいただきました。私は本当に厚い親心と真実でたすけていただいたのです。

兄弟の出直しを通して

私たちは2年2カ月の伏せ込みを終え、島原から大阪に帰ってきました。教会に到着した翌日、前会長様から母宛てに手紙が届きました。「これからの道の歩みに栄えあれと、只々祈るような気持ちで2人を送り出しました。本当の苦労はこれからです。どうかしっかり導いてやってください」とありました。この身上をたすけるために、どれほどの親心をかけていただいたのか、大阪に帰すほうがどれほど楽であられたかと思うと、言葉では言い表せないほどの感謝の思いでいっぱいになりました。

そうして次は、この手紙を読んだ母からの厳しい仕込みが始まったのです。

私が嫁いだ芦島鶴という教会は初代会長が女性の方で、とても理に厳しい方でした。当時、主人の両親は布教所として必死になって教会づとめをしておりました。母は、末っ子でまだ幼い主人の手を引いて朝から教会へ行き、にをいがけにおたすけにと全身全霊で勤めておりました。

また、残された3人の姉たちは早朝にしか会えない父の顔を見たさに必死に起きて、玄関で見送るような毎日でした。子供ながらに寂しい思いもいっぱいしました。

両親の熱い信仰の思いに、家族皆が必死になって通っておりました。

そんな最中に、主人の兄・長男

が、19歳で突如出直したのです。どれほどの悲しみが家族を襲ったか、それは想像を超えるものであったと思います。教会の御用一筋の最中にわが子が出直すなど、誰が想像したでしょう。父にとっても母にとっても、兄弟にとっても、優しくて親思いの兄の出直しは、身が引き裂かれるような思いだったでしょう。深い深い暗闇の日が続きました。そこから抜け出せたのは、母がやっとの思いで、這うようにして出ていったおたすけがきっかけでした。

その後、数十年して、当時の教会に事情が起き、母が継がせていただくことになりました。家族の大節から立ち上がった母は、この道に千に一つの狂いもないと、一切の迷いをなくして、ただひたすらに御恩報じへと進むことになったのです。

お前の顔を見てたら言いたくなった

そしてある日、母から「大きな身上を御守護いただいて、子供も授けていただいたのだから、返済に何年かかってでもいいから、100万円のおつくしを背負って通らせてもらいなさい。お金でしっかり徳を積みなさい」と言われました。私たちは「これが御恩報じになるのなら」と借りて、お供えしました。とにかく早く返済をしようと奮起し何とか返し終えました。

やっと終わった！　と喜んで行った８月の大教会の月次祭の後、島原の前会長様が母に、「来月は大教会長様がご巡教にお見えになるので、つくし運びに励んでくれな」と言いました。母が「もうおたすけする相手も、おつくしをお願いする相手もおりません」と答えましたら、前会長様は私の顔を見て「今度は典子がするよ」とニコニコしておっしゃるのです。

私は思わず、「前会長さん、私のおつくしの返済が終わったことを母からお聞きになったんですね」と尋ねましたら、「いや、お前の顔を見てたら言いたくなった」とおっしゃるのです。私は一体どんな顔をしてたんだと思いながら、その日は大教会を後にしました。

その２日後のことです。お腹に赤ちゃんがいることが分かったのです。こうなった以上、前会長様の「お前の顔を見てたら言いたくなった」という、あの一言が忘れられず、また父に借りることにしました。再び、おつくしの返済の日々が始まりましたが、なぜか私の心は前会長様に喜んでいただけたことが嬉しくて、心が晴れやかになっておりました。

その後、三男を無事出産し、その２年後に四男、その２年後に五男を出産し、現在は５人の息子たちに囲まれて、日々奮闘しております。このおつくしのときに生まれた息子が高校生になりました。小さい頃から人一倍元気で、スポーツに励んでおりましたが、この度、特待生として高校に迎えていただくことになりました。聞いた話によりますと、前例のない特待制度を息子のために適用してくださったということでした。

これはきっと、両親や亡くなった兄を含めた主人の兄弟が、必死で通らせてもらった日々のお陰。

そして、15年前のあの日、前会長様の「お前の顔を見てたら言いたくなった」という一言で蒔かせていただいた種が、15年の時を越えて、しっかりと根を張ってくれているお陰だと思いました。先が見えなくて、苦しくて立ち上がれない日があっても、喜べる日はくる。蒔いた種は絶対に受け取っていただけるんだと思いました。

前会長様が出直されて14年が経とうとしています。言いにくいことでもたすかるならばと、身を捨ててお連れ通りいただきました。「親のためにうんと苦労しなさい」と、何度もお仕込みくださいました。

たすかりにくい身上のみならず、心までたすけてくださったことを一生涯忘れずに、そして両親が今日まで必死に繋いでくれたこの信仰をしっかりと受け継ぎ、教祖百四十年祭年祭活動の最中、尚一層、つくし運び、御恩報じにと心勇んで歩ませていただきたいと思います。

（要旨）

《4月月次祭　感話》

「この道でたすからない者はいない」

芦山都分教会　山下明美

私は昨年の元旦に、御用の上、親の声には「逃げない、断らない、すべて務めさせていただく」と心定めをしました。

すると、その途端に年子奥様より『みちのだい』、養徳社からは『陽気』に原稿執筆のお声がかかり、無事につとめ終えてほっとしておりましたら、このたび大教会長様よりお声を頂きまして、こうして大勢の前に出させていただくことになりました。

主人の身上から

3年前に出直しました主人、芦山都分教会の初代会長・山下久光は信仰初代でした。山下家は代々熱心な仏教徒でしたが、私との結婚を期に、このお道にお引き寄せいただきました。

主人は体格の大きな人でしたが、身体が弱く思うように仕事ができないので、憩の家で診ていただくと腎臓が悪いことが分かりました。お医者様から「左の腎臓が動いていませんよ。右の腎臓まで悪くなると透析になりますね」と言われてしまいました。

私は「身体の弱い人と結婚したのかな」と父に聞きますと、「それは主人の身上ではなく、お前のいんねんやで」と聞かされびっくりしました。父が言うには、私が子供の頃に小児腎臓病を患い、その身上から父と母がこの道に入信したとのことで、「しっかりと自分自身の身上として主人を支えて通らせてもらいなさい」と話してくれました。

その後も身上は思うようにいかない中、父から伏せ込みを進められ、主人は炊事本部で5年間務めて、その後天理市内の青果店で勤めることになりました。

青果店で働いて7年目、主人が34歳のときに、首が回りにくく、違和感があるとのことで、軽い気持ちで町の病院に行き、検査をしました。主人が診察室から出てきた後、先生に呼ばれたので診察室に入ると「悪性リンパ腫に間違いないと思います」と告げられ、頭が真っ白になりました。

診察室から出てくると主人が、「先生に何と言われたか」と聞くので「悪性リンパ腫の疑いと言われました」と告げると、しばらく目を閉じて下を向いておりましたが、目を開けると「分かった。親神様にたすけてもらおう」と言い出しました。

私は「それは分かりますが、明日にでも憩の家で診ていただきましょう。病院にかかりながらでも良いのではないですか」と言いましたが「親神様にたすけていただく」と言って聞き入れてくれませんでした。

おぢばでのありがたい話

次の日も、いつも通り仕事に出かけていきましたが、昼過ぎに帰ってきて「仕事をやめてきた。これから検定講習に行ってくる」と、さっさとカバンに着替えを詰めて詰所に行ってしまいました。

私はご本部に参拝に行き、親神様に「この先、どのように通らせていただいたらよろしいでしょうか。どなたのお口を通してでも教えていただきたい」と申し上げ、教祖殿に回ろうとしたときに、昔は南礼拝場の東の方に障子を立てて説教の場所がありましたので、そこを覗いてみると、女の先生がお一人座っておられました。

先生と目が合いますと、手招きをされたので中に入ると、「あんたわしに聞きたいことあるんか。普段はしばらく人が見えなければ控室に行くのだけれど、今日は不思議とお尻が上がらなんだ。あんたを待ってたんかな。何かあったんか？」と聞かれましたので、主人

が悪性リンパ腫と言われたが入院せず、親神様にたすけていただくと言って検定講習に行っていることを伝え、子供が６人いることを話させてもらうと、「６人も子供さんがいるのか。まだ若いので、にをいがけ・おたすけの経験もそうないのだろう。ところで言葉に訛（なま）りがあるが、お国はどこだ」と聞かれましたので「奄美大島です」と答えると、「昔は奄美から布教師の方が、大島紬を何本か持ってこられ、それを買ってもらって通られている布教師さんがいましたよ。紬は借りれるのか？」「先生、紬ですか」「そうしなければ、どうやって子供さんたちを育てていきますか」「分かりました。親戚が紬工場をしておりますので、委託で借りることはできます」「よかった。じゃあそうしなさい」とのやりとりをしました。突然のことでしたので、「親神様のお声ですか」と尋ねると「そうや」と仰いました。

「ありがとうございました」と立とうとすると、「紬を売りに回ったらあかんで。紬は車に乗せておく。夫婦でにをいがかかってもかからなくても、一生懸命に通るのやで。その時に紬を持っていますと言うて見てもらいなさい。親神様に働いてもらうんやで。わしと今日出会うのも親神様のお働きやろ。２カ月も３カ月も紬が売れなんだら、わしが買うてあげるから、撫養の会長宅に持っておいで」と仰いました。

この先生は、中山まさ様のお母様でした。それからしばらくの時間、いろいろとお話を聞かせていただき、心勇んで帰りました。

心定めて通る日々

それからが私たち夫婦の布教の始まりでした。２週間が経ち主人が帰ってきましたので、経緯を話させてもらうと、「ありがたかったなあ。もったいないお話だね」と言ってくれました。

そして主人が「無くなったで」と首を差し出してきましたので、話を聞くと、講習初日に教祖の御前で「教祖、今日から検定講習に入らせていただきました山下久光でございます。悪性リンパ腫と医者から言われております。どうぞこれから先、教祖の手足として私をお使いください。この先命のある限り神一条、道一条で通らせていただきとうございます」とお願いさせていただいたそうです。

すると次の日からしこりが散っていくのが分かり、首が痒くて痒くて３日越しでしこりが全部消えてしまったと話してくれ、本当に驚きました。

たすけていただいた喜びと、道一条、神一条で通る決意から、その日は夜遅くまで２人でいろいろと話し合い、心定めをさせてもらいました。

一、講社を布教所にさせていただくこと。

二、毎月紬を借りにいくだけではなく、上級、上々級の月次祭に合わせて帰らせていただくこと。

三、１日５人におさづけを取り次がせていただくこと。

四、道一条、神一条で通らせていただくこと。

これを定めて10年間は、不安もありましたが、どうでもこうでもの気持ちと、足を止めれば主人の命はないと心に置いて通らせていただきました。そうして通る中にはいろいろなことがありました。

知り合いの息子さんが交通事故で入院されたと聞き、早速病院へおたすけに行かせてもらい、その方は１カ月程で元気に退院されましたが、同じ部屋の患者さんで意識不明の状態の方がおられました。私はこの方にも早く元気になっていただきたいと思い、次の日からおたすけに通いました。

そんなある日、病室に看護師さんが入ってこられ「お知り合いですか」と尋ねられたので「違います。早く元気になっていただきたくて、おたすけに来させていただいています」と答えると「この病院では宗教活動はしないでください」と怒られてしまいました。

３日程してまた行くと、今度は看護師長さんが入ってきて、私のハッピの襟首をつかんで「出ていってください」とものすごい剣幕

で怒られました。他の入院患者さんや付き添いの方も見ている中、まだ36歳だった私は恥ずかしく「すみません」と頭を下げて病室を出ました。でも不思議なことに帰り道は何だか心の中が温かく、自転車のペダルも軽く感じてきました。

教祖はおつとめをするだけで警察署に引っ張っていかれ、それでも人様のたすかりを願っておられたひながたのお姿を思うと、ありがたく、心の底から勇気が湧き、嬉し涙を流しながら帰りました。それから3日間は家でお願いづとめを勤め、また勇気を振り絞って病院へ行きました。

病室に入ると、同室の方や付き添いの方からはまた来たのかという目で見られましたが、早速意識不明の方におさづけを取り次ぎました。すると次の瞬間、患者さんの目から大粒の涙が流れました。みんなが側に来て口々に「意識が戻ってる。不思議だ」と驚いていました。私の口からは「教祖ありがとうございます」とこぼれていました。同室の付き添いの方々から「奥さんよく頑張ったね」と声をかけられ、その日は嬉しい気持ちで病室を後にしました。

本当におたすけの中には御存命の教祖がいつでもどこでもお連れ通りくださっていると強く感じながら帰らせていただきました。

教祖は見てくださっている

その後、いろいろなお道の先生方や教友との出会いもあり、今日へと繋がっています。特に親しくさせていただいているお2人の話をさせていただきます。

お1人は主人の友人で、炊事本部時代に一緒におられた方です。退職後、広島の布教の家で1年間勤められ、その地で12年単独布教をされました。その間毎月おぢばがえりの際は必ず私共の布教所に一泊され、にをいがけ・おたすけの話や、さまざまな出来事を語り合うのが楽しみで勇みを頂戴しました。

もう1人のAさんは、ある時、おたすけから主人と2人で家に帰りますと、玄関にお米屋さんが2人立って居られて「Aさんからのお供えだそうです。お代はいただいております」と、15kg入りの袋を10袋、玄関に積み上げられました。驚いて、早速Aさんに電話をすると「今日教祖の声を聞かせていただいたよ」と仰る。いつも通り教祖殿の結界の前で参拝をしていると、小さな声で2回「山下、米」と聞こえたそうです。周囲を見ても誰もいなくて「これが教祖の声か」と驚きと感激で、お米をお供えしてくださったとのことでした。

実はこの時、お米がなく、1週間神様にお供えできていませんでした。「教祖は御存命でちゃんと見てくださってるなあ」とお互いに感動に打ち震えた出来事でした。

いろいろな先生方や教友との出会いもあり、そのたびに親神様、教祖のお働きを感じさせていただきました。

そして今から15年前、芦山都分教会の名称の理をお許しいただきました。初代会長の口癖は「この道でたすからない者はいない」でした。この言葉は芦山都の子供・孫に受け継がれています。

いよいよ今年より教祖百四十年祭への年祭活動が始まりました。昨年の秋季大祭には真柱様より諭達をご発布くださいましたが、久しぶりに聞かせていただくお声に感激し心が熱くなり、真柱様のこの年祭にかける大きな思いを感じさせていただきました。「この道でたすからない者はいない」を心に湛（たた）えて、このたびの年祭活動を精いっぱい通らせていただきたいと存じます。

（要旨）

立教百八十六年　四月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、世界一れつをたすけたいとの深い思召により、約束の年限満ちて、教祖をやしろにこの世の表にお現れ下さいました。以来、教祖には口に筆に親神様の親心をお伝え下され、陽気ぐらしへの最後の御教えをお啓き下さいますと共に、身を以てたすけ一条のひながたをお示し下さいました。更に子供の成人を促す上から、定命を縮め、今尚存命の理を以て私共をお導き下さる果てしなき親心の程は、誠に有り難い限りでございます。

私共はこの親心にお応えさせて頂きたいと、仕切って成人の足取りを進めて、時旬の道を勇んで歩ませて頂いておりますが、その中にもこの月の十八日は、教祖には二百二十五回目の御誕生日をお迎え下さる芽出度き日柄でございますので、お許しを頂きました今日の佳き日に、役目にあずかる者一同、慶び心を一つに揃えて、陽気に座りづとめ、てをどりを勤めて、四月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には今日を大切な一日と、参らせて頂いた芦津の道の子達が、おうたを唱和し、日頃賜る御恵みへの感謝に併せて、一層の成人をお誓い申し上げる状を嬉しく御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます。

私共をはじめ教会長、ようぼく一同は、教祖の御誕生日を心から寿ぎ申し上げると共に、我が身思案人間思案を一切納消されて、世界一れつをたすけるためにどんな道中も明るく勇んでお通り下されたひながたを我が道と心に定め、御存命の御守護にお縋り申し上げて、教祖百四十年祭へ向けて成人の道を直向きに歩ませて頂く決心でございます。

何卒、この心定めと時旬に尽くす誠真実をお受け取り下さいまして、教祖の道具衆としてたすけ一条に勇んで働かせて頂き、陽気ぐらしへの道を一手一つに心晴れやかにお連れ通り下さいますよう御守護の程を、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

四月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長		
扈者	竹内義忠		
扈者	岩切正義		
指図方	奥田正德		
賛者	立花善三		
賛者	宗我道明		
てをどり	座りづとめ	大教会長 井筒敏成 今川政治 会長夫人 前会長夫人 今川和子	
	前半	岩切正教 吉田裕和 石川健郎 望月恵美 宗我邦代 松本さだえ	
	後半	湯川正信 川畑正博 梶川和人 岩切治代 河合ふみ子 湯川照代	
地方		井筒文夫 奥田眞治 加世田洋	守田清一 立花善文 中村俊和	樋川泰士 今川聖一 榎康紀
笛		山田道弘	蔑内浩	河合善洋
ちゃんぽん		川畑澄博	河端芳雄	吉田裕樹
拍子木		瀧本眞二郎	瀧本庄司	岡本久昭
太鼓		湯川正圀	西本義之	西本興正
すりがね		岡島秀男	木村真次	新居里実
小鼓		山本義範	浜田宣郎	村田光伸
琴		榎理恵子	河合遊喜恵	中村寿々代
三味線		岡本たねよ	梶川りよ子	山田秀子
胡弓		井筒ちぐさ	松森明美	竹内淳子

献饌長　湯川正圀

伝供　奥田眞治　山本義範　加世田洋　瀧本庄司　西本義之　浜田宣郎　中村俊和　石川健郎　梶川芳男　奥田正儀　花岡忠和　今川聖一　新居里実　湯川正信　川畑正博　瀧本亘　瀧本一太郎　望月慶太　梶川芳征　北村浩　岡秀人　多川明仁　山下吉生　松林英也

在籍者おつとめ練習

大教会では2月より、毎月22日午後から神殿で在籍者有志によるおつとめ練習を行っている。

在籍者によるおつとめ練習は、春秋大祭の前日に全員参加で行っているが、それとは別に婦人会芦津支部（井筒年子支部長）が、毎月22日に男鳴物も入れておつとめ練習を行っていた。

年祭の三年千日に入った今年、男性在籍者の有志が、婦人会に合流する形でのおつとめ練習を提案し、実現したもの。祭典前日は役員会をはじめ、各部・各会が会議を行うため全員参加はできないが、婦人会と若手おつとめ奉仕者が「理の立つおつとめ」の勤修を目指し、練習に励んでいる。

理の立つおつとめを目指し、心を一つに

雅楽総合練習

祭事部雅楽掛（奥田眞治掛長）は、4月21日、詰所で亀岡部属・義立分教会長・泉裕一先生（篳篥）をお招きして、3年振りとなる雅楽総合練習を行った。

総合練習の様子

午前10時に2階大広間に集合。午前中は、篳篥・龍笛・箏のパート別練習に励んだ。昼食をはさんで午後からは、本番通りの総合練習をご教授いただいた。

今回は葬儀でよく使われる曲を中心に、盤渉調の越殿楽・白柱・千秋楽・竹林楽の4曲を吹き込み、練習に励んだ。

参加者は12名。

木綿の会

婦人会芦津支部（井筒年子支部長）は、4月24日、30日の両日、子育て中の婦人会員を対象にした木綿の会を開催した。

本部参拝後、東礼拝場から教祖殿まで廻廊拭きひのきしんを行った後、詰所に移動し、昼食。

その後、「子供に信仰の喜びを伝えよう」をテーマに5人1組になり、ねりあいを行った。

参加者からは、「同世代の方といろいろなお話ができ、ありがたかった」「子供たちに信仰を伝えていくことの大切さを改めて感じた」などの声が聞かれた。

24日、30日合わせて、婦人会員25名、少年会員23名が参加した。

鼓笛コンクール

3月19日、芦津団芦津鼓笛バンドは、コスモスシアター（大阪府貝塚市）で開催された「第51回大阪教区鼓笛コンクール＆フェスティバル」に出演した。

昨秋より出演に向けて練習に取り組み、演奏した曲目は「チャイコフスキーピアノ協奏曲第1番」。少年会員だけでは主要な楽器が揃わないため、スタッフ8名と合わせて21名での出演となった。ほぼ全員が初めて舞台に立つという緊張の中、気持ちを一つに演奏した。

現在はこどもおぢばがえりの鼓笛オンパレードに向け、毎月練習に励んでいる。

初めての舞台で演奏を披露

会長室報

青年勤務

【大教会】

濵本　大徳（島原港）

立教186年４月16日

本部勤務辞退

【布教二課】

岩切　大成（四ツ山）

【電気課】

多川　勇介（善　徳）

【天理教校学園高校】

濵本　大徳（島原港）

【青年会本部】

岡　勇人（紀　船）

立教186年３月31日

本部勤務

【陽心寮】

原田　成人（笠　戸）

【みのり寮】

木村　華恵（芦明徳）

立教186年４月１日

教務部報

おさづけの理拝戴《３月》

立花　笑理（島　原）

山下　佑輝（島　原）

〈拝戴日順　２名〉

初席《３月》

〈２名〉直轄、東大屋

〈１名〉海南、津阪、芦南、名瀬港、沖縄、紀周

〈順序運びより　10名〉

■訃　報■

吉池分教会三代会長

阿佐藤雄氏（あさふじお）

令和５年５月３日出直された。78歳。

告別式は、５月５日大西直喜・上郡分教会長斎主のもと、徳島県三好市の葬祭場で執り行われた。

氏は、昭和20年９月24日生まれ。同45年おさづけの理拝戴。同年修養科第343期修了、同年教会長資格検定講習会修了、同48年教人登録、同54年吉池分教会三代会長に就任された。

大教会では神殿当番奉仕員、上級・吉野川分教会でも神殿奉仕当番を務められ、地元ではタクシーの運転手として、周囲の方々から信頼され、慕われていた。

詳細は上記ＱＲコード「こどもおぢばがえり」オフィシャルサイトをご覧ください。

月例統計（自令和５年１月１日～至令和５年３月31日）

項目 / 名称（）内教会数	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	9	8		
靱（13）	1			
東津（23）				
吉野川（29）	1			
島原（16）	2	2		
日方（15）				
稗島（7）	3			
本津（2）				
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）	1			
門司（6）		2		2
當別（6）				
大島（26）	8			
沖縄（3）	1			
尼崎（2）				
四ツ山（5）				
大冠（2）				
島下（1）	1			
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）				
甲邊（1）		1		
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）				
紀周（3）	1			
勝明（1）				
神の島（1）	1			
兵庫眞洲（1）				
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	1	1		
神滝本（1）				
芦明徳（1）		1		
真明彰化（2）				1
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	30	15	0	3